

島田正治

七月のはじめに、俳優の松村達雄さんが亡くなった。行年九十歳だった。わたしが昭和二十九年に大学を出たのが二十二歳、その四月から東京都下の北多摩郡の田無中学校（現在は西東京市）の国語と書道の教員として就職、その同じ職場に三年先輩の杉谷隆一さんがいた。

ある日、誘われて芝居を観ないかとすすめられた。高円寺南に劇団「創造劇場」というのがあり、そこは、座席が五十しかないという、まことに小さな芝居小屋で俗に ” 五十人劇場 ” とも呼ばれた。そのころとしては小劇場のはしりと思う。杉谷さんはその劇団の演出係をしていた。そして、団長をしていたのが松村達雄さんだった。まだ四十歳になるかならない頃である。その風貌はまことに飄飄としていておおらかさがあつた。

高円寺には何度か脚を運んだ。芝居が終わったあと楽屋で話を聞くのがまた、楽しみであつた。武者小路実篤作「その妹」で盲目の兄を演ずる松村さん、その妹役は奥さんの明美さんだった。

舞台では始めから終わりまで眼を閉じたままで芝居がつづくので松村さんに質問してみた。「よく最初から最後まで眼を閉じていられますね」というと、松村さんは「お客の方に顔をむけている時は眼を閉じていますが、その逆に顔をむけていないときは眼を開いていますよ」と。

狭い楽屋の片隅であぐらを組んで座っているひとりの男性がいた。松村さんがしきりに「連ちゃん、連ちゃん」と呼んでいたから、今思うとあの頃まだ売れない前の三国連太郎でなかったか。

大借金をして建てた芝居小屋も採算があわず、お金が払えず夜逃げ同然でここを出た。団員はみな散りじりばらばらになった。あるレコード会社の社長までやったお父さんは資産家であつた。松村さんは暁星中学、法政大学を出ている。戦争で南方へ従軍、敗戦帰還。生活に困って銀座で似顔絵描き、輪タクの運転手も。そこは役者だから当時のことをおもしろおかしく身振り手振りで話す松村さんだった。借金取りがきても相手を煙に巻いて追い返す話、食べるものに困ってうどん粉はあつたのに、それを焼く油がなくて髪につけるポマードを使ったとか。

----------*-----*-----*-----*-----*-----*

杉谷さんは志があつて学校の職を辞した。わたしもきつとこの影響をうけたにちがいない。五年半勤めた中学校をやめてしまった。教えることと創作することが両立しないことを知つてのことである。それから無収入の無一文になって生活には困つたが、若い二十代半ばの男がひとり生活することぐらいどうということはない。ちょうど同じ頃杉谷さんも同じ境遇にあつたから意気投合して、下目黒に北向き四畳半の部屋を借りて共同生活をはじめた。

その下宿から割と近いところに松村さん夫妻家族が住んでおられたので二人してよく訪ねた。朝の九時か十時ごろはまだ夫妻が起きたばかりで、明美さんが朝食をすませましたか聞かれ、まだですという、ではとって天ぷらの野菜揚げなど作つてご馳走してくださつた。杉谷さんは金銭的な援助もしていたようで、これはあとから聞いた話だ。仕事を求めて探しに行くのに、そのあてさえない。とにかく玄関を出るのだがどっちの方角へ行ったらよいか、そんなとき、持っていた傘を立て、その倒れた方にむかって歩いたという。特に困つたのは雨降りの日であつた。こんな話も聞いて、松村さんの芝居人生の困窮のまただ中であつた、それは涙なくしては語れないひとつのエピソードである。（つづく）